

8 江戸前中期の瀉血療法

○友部 和弘・真柳 誠

すでに曲直瀬道三『啓迪集』の瀉血療法を検討したが、のちヨーロッパ式瀉血が伝来するまでの江戸前中期では、どのように実践されていたのだろうか。これを名著出版刊『近世漢方治験選集』に収載される以下の書にて調査した。

曲直瀬玄朔（一五四九～一六三二）の『医学天正記』『延寿配剂』『処剂座右』。

岡本玄治（一五八七～一六四五）の『道三秘書』『玄治得効配剂』『玄治百一方』。

長沢道寿（一六三七）の『道寿先生医案集』『藪門医案実録』。

古林見宜（一五七九～一六五七）の『見宜翁医按』。

北山友松子（一七〇二）の『北山医案』『増広医方口決

集』。

下津春包の『本邦名医類案』。

吉益東洞（一七〇二～七三）の『建殊録』『東洞先生投剂証録』。

吉益南涯（一七五〇～一八一三）の『続建殊録』『南涯先生治験録』『南涯先生治験』『成蹟録』『好生緒言』。

以上のうち、刺絡に関する記載があつた書の該当部分を抜粋して以下に示す。

①『処剂座右』（原漢文）四十八癰疽「片桐市正が背癰を患ひ、脾俞の左穴に生ず。頭痛し、食少なく、味なく、大便結す。血を和す。敗毒加芷蒼朮芥。曼すべしと云う。夜、痛み甚だしく、頭痛いまだ止まざるに、外科は蛭針を用う…」。

②『玄治得効配剂』（原漢文）傷寒門「壯男。傷寒の熱毒、裏に入り、数腕を瀉血す。薬を用いて血止み、神氣半ば安んず。然りといえども食せず、口少しく乾き、大便久しく通ぜず、脈数弱。寒冷の剂、滋陰の剂、益氣の剂、俱に効かず。…右の証、瀉血の後に津液枯渇して口乾き、大便結する故に…」。

③『玄治百一方』（原片仮名混じり文）傷寒門「壯男。傷寒を患い、熱毒の裡に入り、数椀を瀉血す。薬を用いて止血み、神気大半安んず。然りといえども食せず、口少しく乾き、大便久しく通ぜず、脈数弱。寒涼の薬、滋陰の剂、但だ効かず。∴右の症、汗すべしが、汗せざる故に熱毒、裡に入りて、血を瀉するぞ」。

④『見宜翁医按』（原漢文）第十七丁オモテ「室女：頭に瘍を發す。先生、乃ちこれに針せしむ。血出でて瘡ゆ」。

⑤『本邦名医類案』（原片仮名混じり文）咽喉門・曲直瀬正琳「丹溪の云わく。喉舌の疾はみな火熱に属す。数種の名、軽重の異ありと云えども、乃ち火の微甚の故なり。∴重くして急なるものは惟だ砭針を用いて血を刺す。最上の策也」。

⑥『南涯先生治驗』（「野上郡奥佐々村の某者、年五十ばかり。去年七月時分より舌を病む。其の症、痛まず痒まず、漸々に舌張り、今にては大になり、自由ならず。涎頻りに出、語言することあたわず、飲食も下りかね、その外胸腹を案ずるに他に症なく、衆医の薬売等を用いれども寸効なく、治を予に乞う。三稜針を以て出血し、桃

仁承氣、その外、奇薬等を用いれども寸効なく∴」。

今回調査した江戸前中期の湯液医家の治験集計十九書には、膨大な数の治験例が載る。しかし瀉血関連の記載は以上のごとく計五書に六例（実質五例）のみで、実際の治験はわずか四例にすぎない。これは当時の湯液医家にとって、瀉血が稀な治療法だったことを示唆する。

一方、瀉血の記述は江戸前期の医家にやや多く、みな曲直瀬系であるが、中期では古方系の吉益南涯だけだった。他方、対象疾患では癰疽・瘍などでき物の類、また口舌の病が五例中四例ある。同様の傾向は『啓迪集』の瀉血療法でもみられた。この曲直瀬系における瀉血療法の傾向は興味深い。

針灸医家の治験記録は未検討であるが、今回の調査結果と比較するならば、あるいは興味深い傾向を窺えるかも知れない。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究部）